

夏目漱石

教育と文芸

教育と文芸

明治四十四年六月十八日
長野県会議事院において

わたくしは思いがけなくまえから当地の教育会のご招待を受けました。およそ一カ月まえにご通知がありましたが、わたくしは、その時になってみなければ、出られるか出られぬかわからぬために、すぐにお答えすることができませんでした。しかし、ご懇切のご招待ですから、義理にもと思ひまして、からだだけ出かけてまいりました。別におもしろいお話もできません、まえ申したとおり、からだだけ義理にもと出かけたわけであります。

わたくしのやる演題は、こういう教育会の会場での経験がないのでこまりました。が、名が教育会であるし、引き受けるわたくしは文学に関係あるものであるから、教育と文芸ということにするがよいと思ひまして、こういう題にしました。この教育と文芸というのは、諸君が主であるから、まげて教育をさきとしたのであります。よく誤解されることがありますので、そんなことがあつてはすみませんから、ちよつと注意を申し述べておきます。教育といえはおもに学校教育であるように思われますが、今わたくしの教育というのは、社会教育および

家庭教育までも含んだものであります。

またわたくしのここにいわゆる文芸は文学である、日本における文学といえは、まず小説戯曲であると思いません。順序は矛盾しましたが、広義の教育、ことに、徳育とそれから文学の方面、ことに小説戯曲との関係連絡の状態についてお話いたします。日本における教育を昔と今とに區別して相比較するに、昔の教育は、一種の理想をたてて、その理想をぜひ実現しようとする教育である。しかして、その理想なるものが、忠とか孝とかいう、一種抽象した概念をただちに実際として、すなわちこの世

に有りうるものとして、それを理想とさせた、すなわち孔子を本家として、全然そのとおりにならなくとも、とにかくそれを目あてとして行くのであります。

なおくわしく言いますと、聖人といえは孔子、仏といえは釈迦しやか、節婦貞女忠臣孝子は、一種の理想のかたまりで、世の中にありえないほどの理想をもって進まねばならなかった。親が、子どもということを見かぬときは、二十四孝を引き出して子どもを戒めると、子どもは閉口するとうようなふうであります。それで昔は上のほうには束縛がなくて、上の下に対する束縛がある、これは

よくない、親が子に対する理想はあるが、子が親に対する理想はなかった。妻が夫に、臣が君に対する理想はなかったのです。すなわち、忠臣貞女とかいうがごときものを完全なものとして、孝子は親のこと、忠臣は君のこと、貞女は夫のことをばかり考えていた。まことにいろいろなものである。その原因は科学的精神が乏しかったためで、その理想を批評せず吟味せずにこれを行なっていたというのである。また、昔は階級制度がきびしいために、過去の英雄豪傑は非常にえらい人のように見えて、自分より上の人は非常にえらく、かつ古人が世の中に存

在しうるといふ信仰があつたため、また一は所が隔たつていて目のあたり見なれぬために、遠隔の地の人のことは非常に誇大して考えられたものである、今は交通が便利であるためにそんなことがない、わたくしなども、あまり飛び出さないと大家と見られるであろう。

さて、当時は理想を目前に置き、自分の理想を實現しようとして一種の感激を前に置いてやるから、一種の感激教育となりまして、知のほうは主でなく、インスピレーションともいふような情緒の教育でありました。なんでもできると思う、精神一到なにごとかならざらんというよ

うなことを、事実と思っている。意気天をつく。怒髪天をつく。炳ひとして日月うんぬんというごとき、こういうことばを古人は盛んに用いた。感激的というのはこんなありさまで、情緒的教育でありましたから、一般の人の生活状態もエモーションナルで努力主義でありました。そういう教育を受ける者は、まえのようなありさまであります。社会はどうかというと、非常に厳格で、少しのあやまちも許さぬというようになり、少しく申しわけがなければ坊主となり、切腹するということ感激主義であった。すなわち社会の本能からそういうことになったもので、

だいたいよりこれが日本の主眼とするところでありました。それが明治になって非常に異なってきました。

四十余年間の歴史を見ると、昔は理想から出立した教育が、今は事実から出発する教育に変化しつつあるのであります、事実から出発するほうは、理想はあるけれども実行はできぬ、概念的の精神によって人は成立するものでない、人間は表裏のあるものであるとして、社会もおのれも教育するのであります。昔は公でも私でもなんでも皆孝で押し通したものであるが、今は一面に孝があれば他面に不孝があるものとしてやっていく。すなわち、

昔は一元的、今は二元的である、すべて孝で貫き忠で貫くことはできぬ。これは想像の結果である。昔の感激主義に対して、今の教育はそれを失わする教育である、西洋では迷よりさめるといふ、日本では意味がちがうが、まあデイスイリユージョン、さめる、といふのであります。なぜ昔はそんなふうであったか。話は余談にはいるが、ドイツの哲学者が概念を作つて定義を作つたのであります。しかし、巡査の概念として白い服を着てサーベルをさしているときめると、一面には巡査が和服でへこ帯のこともあるから、概念で決めてしまふと窮屈になる。

定義で決めてしまつては、世の中のことがわからなくなると仏国の学者はいうている。

物は常に変化していく、世の中のことは常に変化する、それで孔子という概念を決めて、これを理想としてやってきたものが、のちにこれがまちがいであつたということとを悟るといふような場合もできてくる。こういう変化はなぜ起こつたか、これは物理化学博物などの科学が進歩して、物をよく見て、研究してみる。こういう科学的精神を、社会にも応用してくる。また、階級もなくなる、交通も便利になる、こういういろいろな事情から、つい

に今日のごとき思想に変化してきてきたのであります。

道徳上のことで、古人の少しもゆるさなかつたことを、今の人はよほど許容する、わがままをも許す、社会がゆるやかになる、ひっきょう道徳的価値の変化ということができてきた。すなわち自分というものを發揮して、それで短所欠点ことごとくあらわすことをなんとも思わない。そして、無理のことがなくなる。昔は負け惜しみをしたものだ、残酷なことも忍んだものだ。今はそれがだんだんなくなつて、自分の弱点をそれほど恐れずに世の中に出すことをなんとも思わない。それでいにしえの人

の弊はどんなことかというところ、多少偽りの点がありました。今の人は正直で、自分を偽らずに表わす、こういうふうで寛容的精神が発達してきた。しかして、社会もまたこれを入れてきたのであります。昔はいっぺん社会から葬られた者は、容易に回復することができなかつたが、今日では人のうわさも七十五日というごとく寛大となつたのであります。社会の制裁がゆるんだというかもしれません。一方から言いましたならば、事実にならうという欠点の有らうることを二元的に認めて、これに寛容的態度を示したのであります。ひっきょう無理がなくなり、

概念の束縛がなくなり、事実が現われたのであります。昔スパルタの教育に、キツネを隠してそのキツネが自分の腸をえぐり出しても、なお黙っていたということがあるが、今はそういうやせがまんはなくなったのである。現今の教育の結果は、自分の特点をも露骨に正直に人の前に表わすことを非常なる恥辱とはしないのであります。これは事実という第一のものが一元的でないということをあらかじめ許すからである。わたくしの家へよく若い者がたずねてまいります、その学生が帰って手紙をよこす。その中にあなたの家をたずねたときに思いき

つてはいろいろか、いやはいるまいかとしばらくちゅうちよした、なるべくならおるすであればよい、さらに会わぬと言ってくればよいと思ったというような露骨なことが書いてある。昔、わたくしらの書生のころには、人を訪問して、いなければよいがと思うてもそういうことをその人の前に告白するような正直な実際的なことはしなかつたものである。やせがまんをして、実は堂々たるもののごとく装って、人の前にもこれをふいちようしたのである。感激的教育概念にとらわれたる薫化がこういう不正直なやせがまんの人間を作り出したのである。

さて、一方文学を考察してみまするに、これを大別してロマンチズム、ナチュラリズムの二種類とすることが出来る。前者は適當の訳字がないために、わたくしが作つてロマン主義としておきましたが、後者のナチュラリズムは自然派と称しております。この両者をまえに申し述べた教育と対照いたしますと、ロマンチズムと、昔の徳育すなわち概念にとらわれたる教育と特徴を同じゆうし、ナチュラリズムと現今の事実を主とする教育と、相通うのであります。以前文芸は道德を超絶するという議論があり、またこれを論じた大家もあつたのでありま

すけれども、これは大なるまちがいで、なるほど道德と文芸は接触しない点もあるけれども、大部分は相連つてゐる。ただわずかに倫理と芸術と両立せないで、どちらかを捨てねばならぬ場合がないではありません。たとえばわたくしがこの机を押している、いつしかこの机とともに落ちたとします。この落ちたという事実に対して、諸君は必ず笑われるにちがいない。しかし倫理的に申したならば、人が落ちたというに笑うはずがない、きのどくだという同情があつてしかるべきである、ことにわたくしのような招かれて来た者に対する礼儀としても、笑

うのは倫理的でないことはあきらかである。けれども、笑うということと、きのどくだと思ふことと、どちらか捨てねばならぬ場合に、こっけい趣味のうえにこれを観賞するは、一種の芸術的の見方であります。けれどもわたくしが、脳シントウを起こして倒れたとすれば、諸君の笑いは必ず倫理的の同情に變ずるにちがいますまい。こういうふうにある程度まで芸術と倫理と相離るる部分はあるけれども、最後または根底には倫理的認容がなければならぬのであります。したがって、小説戯曲の材料は七分まで、徳義的批判に訴えて取捨選択せられる

のであります。恋を描くにロマン主義の場では途中で単に顔を合わせたばかりですぐに恋情がなりたち、このために盲目になったり、びっこになったりして、煩悶懊惱はんもんおうのうするといふようなことになる。しかしこんな事實は、實際ありえないことである。そこが感激派の小説で、ある情緒を誇大して、すなわち抽象的理想を具体化したようなものを作り上げたのであります、事實からは遠いけれど、感激は多いのであります。

ロマンチックの道德はなんとなしに対象物をして大きく偉く感じさせる。ナチュラリズムの道德は、自己の欠

点を暴露させる正直なかわいらしいところがある。

ロマンチシズムの芸術は情緒的エモーショナルで、人をして偉く大きく思わせるし、ナチュラリズムの芸術は理知的で、正直に實際を思わしめる。すなわち、文学上から見てロマンチシズムは偽りを伝えるが、また人の精神に偉大とか崇高とかの現象を認めしめるから、人の精神を未来に結合させる。ナチュラリズムは、材料の取り扱い方が正直で、また現在の事実を發揮することに務むるから、人の精神を現在に結合させる、たとえば、人間をはじめから不完全なものとして見て人の欠点を評したる

ものである。ロマンチズムはおのれ以上の偉大なるものを材料として取り扱うから、感激的であるけれども、その材料が読む者聞く者にはまったく没交渉で、印象によそよそしいところがある。これにひきかえて、ナチュラリズムはいかにきたないくだらないものでも、自分と
いうものがその鏡に写ってなんだか親しくしみじみと感
得せしめる。よくよく考えてみると、人というものは、
平時においては軽微の程度におけるロマンチズムの主
張者で、ある者を批評したり、要求するに自己の力以上
のものをもってしている。

いっただい人間の心は自分以上のものを、渴仰する根本的の要求を持っている。今日よりは明日に一部の望みを有するのである。自分より偉いもの、自分より高いものを望むごとく、現在よりも将来に光明を発見せんとするものである。以上述べたごとく、ロマンチズムの思想すなわち一つの理想主義の流れは、永久に変わることなく、深く人心の奥底に長き生命を有しているものであります。したがってロマン主義の文学は永久に生存の権利を有しております。人心のこの響きに触れているかぎり、ロマン主義の思想は永久に伝わるものであります。これ

に反して、ナチュラリズムの道德は前述のごとく、寛容的精神に富んでいる。事實を事實としてありのままを描いたものが、真のナチュラリズムの文学である。自己解剖、自己批判の傾向がだんだんと人心の間に広まりつつあり、精神がきわめて平民的に、換言すれば平凡的になつてきたのであります。人間の人間らしいところの写実をするのが自然主義の特徴で、ロマン主義の人間以上、自己以上、ほとんど望んで得べからざるほどの人物理想を描いたのに対して、きわめて通常のもをそのまま、そのままというところに重きを置いて世態をありのまま

に、欠点も、弱点も、表裏ともに、一元にあらぬ二元以上
にわたって實際を描き出すのであります。したがって、
カーライルの英雄崇拜的傾向の欲求が永久に存在するこ
とは前述のとおりであるが、今はこれに多少の変化をき
たしたというわけであります。

さて、かく自然主義の道德文学のために、自己改良の
念が浅く向上渴仰の動機が薄くなるということは必ずあ
るに相違ない。これはたしかに欠点であります。

したがって、現代の教育の傾向、文学の潮流が、自然
主義的であるためにぼつぼつその弊害が表われて、日本

の自然主義という言葉辞ははなはだしく卑しむべきものになつてきた。けれども、これはまちがいである。自然主義はそんな非倫理的なものではない。自然主義そのものは日本の文学の一部に表われたようなものではなく、単にかれらはその欠点のみを示したのである。まえにも言つたとおり、いかに文学といえどもけつして倫理範圍を脱しているものではなく、少なくとも倫理的渴仰の念をいずこにかきざさしめなければならぬものであります。

人間の心の底に永久にロマン主義の英雄崇拜的情緒的の傾向の存するかぎり、この心は永存するものであるが、

それをまったく無視して、人間の弱点ばかりを示すのは、文学としての真価を有するものでない、かたわなできそこないの芸術であります。いかに人間の弱点を書いたものでも、その弱点の全体を読むうちに、どこにかこれに対する悪感おかんとか、あるいは別に倫理的の要求とかが読者の心にもえいずるような文学でなければならぬ。これが人心の自然の要求で、芸術もまたこの範囲にある。今の一部の小説が人にきらわれるは、自然主義そのものの欠点でなく取り扱う同派の文学者の失敗で、ひつきよう過去の極端なるロマン主義の反動であります。反動は正動

よりも常規を逸する。ゆえにわれわれは反動として多少この間の消息を了とせねばならぬ。

さて、自然主義は遠慮なく事実そのままを人の前に暴露し、または描き出すため種々なる欠点を生ずるにいたりしましたが、これを救うは過去のロマン主義を復興するにあらずして、新ロマン主義ともいうべきものを興すにあらうかと思う。新ロマン主義というも、まったく以前のロマン主義とは別物である。およそ歴史は繰り返すものなりというけれども、歴史はけっして繰り返さぬのである。繰り返すというのはまちがいである。いかなる場

合にもあともどりをすることなく、前へ前へと走っている。

教育および文芸とて、自然主義に弊害があるからとて、昔にはもどらぬ。もしもどつても、それはまったく新たな形式内容を有するもので、浅薄なる観察者には昔時にもどりたる感じを起こさせるけれども、実はさようではないのであります。しかして、自然主義に反動したものとすれば、新ロマン主義ともいふべきものは、自然主義対ロマン主義の最後に生ずるはずである。新ロマン主義というとも、けっして昔のロマン主義に返つた

のではない、まったく別物なのであります。

すなわち新ロマン主義は、昔時のロマン主義のように空想に近い理想をたてずに、程度の低い実際に近い達成しえらるる目的をたてて、やっけていくのである。社会は常に二元である。ロマン主義の調和は、時と場所により、その要求に応じて二者が適宜に調諧ちようかいして、甲の場合には自然主義六分ロマン主義四分というように、時代および場所の要求に伴うて、両者の完全なる調和を保つところに、新ロマン主義を認める。将来はこうなることであろうと思う。

昔の感激的の教育と、当時の情緒的なロマン主義の文芸と、今の科学上の真を重んずる教育主義と、空想的ならざる自然主義の文芸と、相連なつて両者の変遷および関係がめいりようになるのであります。かくして人心に向上の念がある以上、永久にロマン主義の存続を認むるとともに、すべての真に価値を発見する自然主義もまたじゅうぶんなる生命を存して、この二者の調和が今後の重なる傾向となるべきものと思ふのであります。

近ごろ教育者には文学はいらぬというものもあるが、自分の今までのお話はまったく教育に関係がないという

ことができぬ。現時の教育において、小学校中等学校はロマン主義で、大学などにいたっては、ナチュラル主義のものとなる。この二者は密接なる関係を有して、二つであるけれどもつまりは一つに重なるものと見てよろしいのであります。ゆえに、まえ申したとおり、文学と教育とはけっして離れないものであるのです。（文責記者にあり）

〈明治四四年七月一日 『信濃教育』〉

日本文学電子図書館

「夏目漱石全集 第3巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂書店

1965年8月31日 初版

日本文学電子図書館